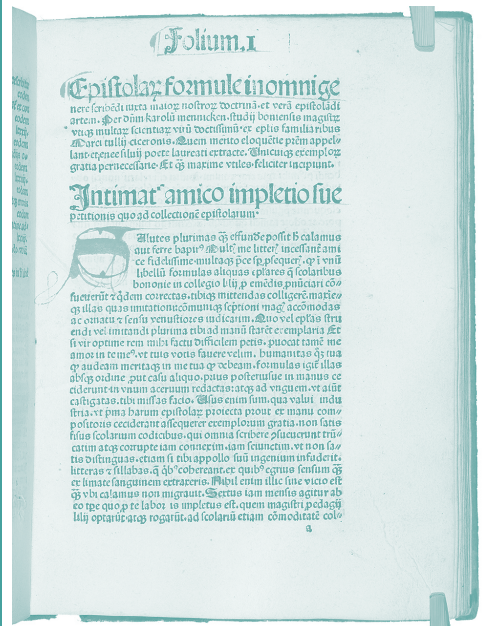


# Newsletter 35

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第35号/2019年11月30日発行

## Contents

- 巻頭言 自由な人間のための、そして自由な人間になるための学がく
- 特集Ⅰ 「盤基研究」
- 特集Ⅱ 「情報の教養学」「日吉行事企画委員会 (HAPP)」
- 特集Ⅲ 「庄内セミナー」
- 特集Ⅳ 「日吉キャンパス公開講座」「学習相談」
- 特集Ⅴ 「研究の現場から」読書会「晴読雨読」
- 活動予定 10月～2020年3月
- 私の〇〇自慢



## 自由な人間のための、そして自由な人間になるための学がく

教養研究センター副所長  
 瀧本佳香子 (商学部)  
 Kayoko Takimoto

2019年10月1日に教養研究センター副所長に就きました。新設された4つ目の副所長ポストです。実は、就任前に私が教養研究センターの活動に参加した機会はごくわずかでした。教養研究センターが開所したのは2002年7月ですが、その直後の2002年9月から私は塾派遣留学で2年間不在となりました。帰国後に当時の所長からのお声がけで所員になりましたが、何年か所員の名前を連ねただけでした。このような次第なので、副所長を拝命したことに呆然とし何をすべきなのか見当がつかないという情けない状態なのですが、教養研究センターの活動について、そして、教養とは何かについて私なりに考えていることを、以下に記してみます。

教養研究センターの「ミッション・沿革」には、第一のミッションとして「『教養』を定義するための研究を行うこと」が掲げられています。そして「福澤先生の言う『学問』とは、社会にも自分にも役にたつ〈教養〉のことであり」、「〈教養〉 = 『学問』のあり方は (…) 時代とともに姿を変えていくものであり、それは人間にとって絶対的に必要なものでありながら、

いまだに『教養とはどのようなものか?』『教養はどのような役割を果たすのか?』『教養は何のために必要か?』といった疑問に明確に答えることができた人はいません」と説明されています。これらの問いをめぐって教養研究センターの活動は展開されてきましたが、明確な答えが出ていない問いであるだけに、その活動は実に多様です。

私は、今日における教養の本質は、絶えず変化し続ける多様性ではないかと思います。Liberal artsという語を念頭に置けば、教養の源は古代地中海世界にまで遡ります。キケロが定型化した、古代における教養教育は、自由人、つまり奴隷ではない人間の徳を涵養するための教育でした。そして、キケロの昔から今日まで、教養には時代や地域によって異なる定義や役割が与えられてきました。そのため、教養というものをめぐる議論の歴史を見ると、もはや今日において教養というのは明確な定義づけや定型化を拒むものではないかと思えます。しかし、曖昧で不安定なものでは決してなく、過去から現在までの、そして未来に行われるであろう人間の知的活動を包括するような、盤石で豊饒な諸学の融合体が教養だといえるのではないのでしょうか。そして、教養の定義がどうであれ、私は、学ぶことによって人間は精神の自由度と自立度を高めることができる、つまり、人間は自らを解放するために学ぶのだと思っています。

キケロが確立した修辭学的規範はさまざまなジャンルに応用された。その一つである書簡作成法はヨーロッパ全域に広がった。これは慶應義塾図書館所蔵のインキュナブラ (挿藍期印刷本) であるマネケン『手紙の書き方』。



# 基盤研究

## 文理連携プロジェクト 医学史と生命科学論

第2回：ラトゥールの科学論と「物の歴史性」を非還元性の原則から捉え直す

第3回：Pursuing Global Health: Where Medicine Meets Social Science, Humanities, and Engineering

慶應義塾大学の多くの学部の1・2年生らが、将来三田・矢上・信濃町・芝などで受ける専門的な学問とく「接続」できる別の学問を取り込むことは、日吉キャンパスの教員たちの一つの目標です。そのため、2019年度の4月から文系と理系の異なった視点を組み合わせて接続する「文理連携プロジェクト」を開催しています。冒頭の4月16日の鈴木による第1回の講演のあと、5月21日と6月25日には、それぞれ第2回と第3回の研究講演会が行われました。

5月21日の第2回には、本塾の理工学部の教員である荒金直人先生による『ラトゥールの科学論と「物の歴史性」を非還元性の原則から捉え直す』が行われました。フランスの哲学者であるブルーノ・ラトゥールを取り上げ、彼の科学論を論じたものです。科学を同時代に行われる科学として考えたら、「行為者の網を次々に展開させて新たなブラックボックスを大量に作り出す動的で不安定な活動」であり、現代の科学は「技術や産業や教育や政治など、社会のあらゆる側面と密接に関わり合う」営みであるという結論です。

6月25日の第3回は、慶應義塾大学の卒業生で、アメリカの大学院やアメリカ・イギリスの研究者・教員を経験し、

現在は松蔭大学の教員である松浦広明先生の講演でした。松浦先生は、グローバルな疾病や健康を理解するには、医学だけでなく、それと結びついたグローバルな経済学や人口学との組み合わせが重要であることを強調しました。これは、WHOとイングランドのヨーク大学が行っている共同プロジェクトGlobal Health Histories Seminarと共同で行われたものであり、松浦先生の講演とともに、鈴木による1930年代の朝鮮人移民の精神医療についての講演も行われました。

以上の講演原稿やPPTなどに関しては、ウェブサイトをご覧ください。  
(鈴木晃仁)

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/research/kiban/bunri2019.php>



荒金直人氏



松浦広明氏

## 講演会no.4 鷺見洋一

### 「教養」としての『百科全書』—共時性の中の文化と知識

長い梅雨が明けたばかりの2019年7月25日、来往舎シンポジウムスペースに於いて、鷺見洋一名誉教授による基盤研究講演会no.4が行われました。ヨーロッパにおける知の集大成として、教養を考える上で必須のトピックである『百科全書』について、約50名の参加者と共に充実した講義を聴き、活発な討議を行うことができました。鷺見先生は、1967年に南仏モンペリエ市のポール・ヴァレリー大学に留学され、『百科全書』研究の権威ジャック・ブルースト教授に師事されました。今回の講演の論点は、タイトルにある「共時性」です。例えば、整然と並んでいるデータを、ランダムに並び替える時、思いがけない遭遇、衝突や結合が起こり、それが再び融和し始めることがあります。その際、データの項目は、「モチーフ」であり、必ずしも系統的に並べて理解される必要はないのです。それこそ、私たちが日頃何かを「思い出す」営みであり、また、独創的な発想が生まれる切っ掛けなのかもしれません。この講演において鷺見先生は、『百科全書』が従来の読書のメン

タルモデルにも、叙述の様式にも当て嵌まらない—対立意見のポリフォニー、借用の多用、編集者の介入—共時性のネットワークであることをデイドロの生涯と合わせて詳しく説明されました。また、啓蒙主義の産物である『百科全書』が同時に商業的な冒険でもあったこと、知識が（ヒエラルキーではなく）横並びに取り入れられる具体的な形は、まさに目から鱗が落ちる思いでした。5月の事前打ち合わせ、資料の作成など、大変丁寧に講演会に取り組んでくださったにも拘わらず、当日、機材の不具合で鷺見先生には大変なご迷惑をかけてしまったことをコーディネーターとして反省しています。この講演内容については、後日教養研究センターのウェブサイトで公開されます。

(小菅隼人)



# 情報の教養学

## 春学期の講演を振り返って

2019年度春学期の「情報の教養学」では、情報の光と影というテーマで、特に情報の利用に注目した講演3件を開催しました。まず、福井健策氏（弁護士）は、法律のない肖像権について講演されました。肖像使用の判断基準の例を示し、いくつかの事例を聴衆と一緒に考えることにより、肖像権の難しさを議論しました。次に、佐藤優氏（作家・元外務省主任分析官）は、政治など多様な話題をご自身の経験から、そこにおける教養の重要性を説きました。最後に、神武直彦氏（システムデザイン・マネジメント研究科教授）は、海外における農業から近隣の小学校におけるスポーツまで、様々な事例をとりあげながら、データの活用について講演されました。ほとんどはデータ活用の良い面でしたが、データの帰属先やセキュリティなどの問題についても述べました。いずれの講演も参加者は多く、特に佐藤氏の回は会場内に収まらないほどとなり、大盛況でした。

(高田真吾)

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

**100万人の「肖像権」90分講座**  
どこまで出せる？どこからNG？

4月24日 18:15~19:45 (水)

講師：福井 健策

会場：日吉メディアセンター

問い合わせ：talowase-lib@adst.keio.ac.jp

**データ駆動型社会の光と影**

6月5日 18:15~19:45 (水)

講師：神武 直彦

会場：シンポジウムスペース

問い合わせ：talowase-lib@adst.keio.ac.jp

**インターネットリジェンズにおける教養の意味**

5月8日 18:15~19:45 (水)

講師：佐藤 優

会場：日吉メディアセンター

問い合わせ：talowase-lib@adst.keio.ac.jp

## 【情報の教養学】2019年度秋学期スケジュール

- 第5回「ビットコインの設計と通貨の新时代」  
講師：坂井 豊貴（経済学部教授）  
10月30日（水）18:15~19:45  
来往舎 シンポジウムスペース
- 第6回「インターネット企業におけるデータとAIの作り方、使い方」  
講師：角田 直行（ヤフー株式会社 技術戦略本部 TI室室長）  
11月6日（水）18:15~19:45  
来往舎 シンポジウムスペース

# 日吉行事企画委員会 (HAPP)

## 春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）は従来、春学期に新入生歓迎行事を、秋学期には塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催してきました。2018年度からはしかしながら、活動の方針を変更し、主に春学期に開催する、委員会が主体となって催すイベントについては、「新入生歓迎行事」という位置付けは行わなくてもよいとしました。この場合、キャンパスのコミュニティー全体に対して行う企画という性格を持たせることにし、イベント名称は、「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」となります。「新入生歓迎行事」と「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」のどちらにおいても、継続性の強い催し物を優先して開催していくことになっています。

日吉で開催される2019年度の新入生歓迎行事は、昨年同様、8つの企画がスケジュールされました（ただし、1企画についてはまだ計画の段階にある）。毎年恒例となっている、舞踏の公演、著名者による講演会、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」、日吉メディアセンターの中でのコンサートなどが催されました。HAPPの活動の詳細は、HAPPのウェブサイトをご覧ください。

(石井 明)

<http://happ.hc.keio.ac.jp/index.html>

## 2019年度新入生歓迎行事一覧

犬丸治講演会 平成歌舞伎を振り返る 歌舞伎よもやま話	4月6日（土）
上杉満代舞踏公演 命	5月24日（金）
ライブラリーコンサート 2019春 in 日吉	5月24日（金） 31日（金）
桂吉坊にきく藝—古典芸能の中の落語— （ことばの世界V）	5月29日（水）
吉増剛造 後輩たちに語る 一慶應義塾 のこと、新作映画「幻を見るひと 京都 の吉増剛造」のことなど—	5月30日（木）
日吉音楽祭2019	7月6日（土） 13日（土） 10月5日（土）
出雲大社の建築に見る古代観 —近世人の夢見た古代出雲—	10月26日（土）

**「平成歌舞伎を振り返る 歌舞伎よもやま話」**

4月6日（土）18:00~20:00

会場：日吉メディアセンター

問い合わせ：talowase-lib@adst.keio.ac.jp

**室内楽・ピアノ マラソンコンサート**

10月5日（土）14時開演

会場：日吉メディアセンター

問い合わせ：talowase-lib@adst.keio.ac.jp

4日間の概要

教養研究センターが庄内地方の皆様のご協力を得て育ててきた「庄内セミナー」は記念すべき第10回目を迎え、今回は8月29日から9月1日まで、学生・院生13名とスタッフ8名の総勢21名で出かけました。大嵐に見舞われることもなく無事終了でき安堵しています。

セミナーの主題は例年「庄内に学ぶ<生命>」ですが、今回は副題であえて「死」を「生」の前に配置し「死から学ぶ生」として参加者の意識を揺さぶることにしました。

地元の方々や慶應の先生方から集中的にお話を伺える贅沢はこのセミナーの魅力です。事前講習会では、敬和学園大学名誉教授の神田より子先生に庄内の山岳信仰と修験の歴史・文化について講演して頂きました。そしてセミナーの幕開けは松ヶ岡開墾場でした。死から学ぶ生にふさわしく、かつて蚕の命と引き換えに絹糸に新しい命を吹き込んでいた場所です。由緒ある本陣という建物で酒井家第18代当主酒井忠久様に庄内と酒井家について紹介講演をして頂き、鶴岡シルク株式会社代表取締役の大和匡輔様にエネルギーにビジネスチャンスを作り出す日々について伺いました。初日の夜は鶴岡総合研究所の東山昭子先生に庄内の死生観について語って頂く中で「お山が見ている」とい

死から学ぶ生

第10回を迎えた庄内セミナー「庄内に学ぶ<生命>」。今回のテーマ「死から学ぶ生」を正面から取り扱うセッションで、富田勝・先端生命科学研究所長と共に話題提供役を務めさせていただきました。生の終着点であると同時にその裏面でもある死にことさら注目することで、いわばその鏡から照り返す光の下であらためて生を見つめ直す試みでした。生命科学から死を眺めたとき、それは単に経年劣化によってもたらされるものではなく、あらかじめプログラム化されて生に織り込まれている可能性が高いことを幾つかの説得的な事例を交えて呈示された富田所長の問題提起を承けて、私はおおよそ次のような話をしてみました。

死の内には、一見区別し難いけれども、よく見れば似て非なる二つの顔が潜んではいないか。一つは、時と場所を越えて共有され・連綿と受け継がれていく「存在」という顔。私やあなたといった個別の存在者はいずれその輪郭を失って消えてゆくけれど、生そのものは他人たち・他の生き物たちに分けもたれてつねに「存在」し続ける。逆から言えば、生そのものの存続こそが肝要なのであり、個別の存在者はその生の一時的な乗り物に過ぎない。したがって死とは、個別の存在者がその存在者としての輪郭を失って生そのものへ回帰し、その生から他の存在者が自らを形作る輪郭を得て姿を現わす一連の過程の一コマ以外ではない。つまり死は生の内に孕まれた一つのエピソードであり、先のプログラム化された死はその生命科学的表現と言ってよい。自然の営みの中での死とは、このようなものではないか。

だが他方で死は、私の下で姿を現わした世界のすべてが、

# 第10回庄内セミナー

## いのち 「庄内に学ぶ<生命>—死から学ぶ生—」



山伏体験修了式

う表現を教わりました。私たちを見ていてくれる山（月山と先祖代々の御霊）を指し、先祖代々から繋がる自分を大切に土地ならではの表現です。二日目は藩校致道館で慶應義塾高等学校の鳥海奈都子先生に論語について解説して頂き富樫恒文氏のリードで庄内論語の素読を行いました。私たちが教室で学んだ読み下し文とはだいぶ異なる言い回しに神経を研ぎ澄ませました。昼食は家庭の味を堪能できる知憩軒で頂き、店主の長南光さんが最近完成させた仏画三部作の美しい織物の表裏をじっくり拝見し、織物の裏面こそが表の糸を支える無くてはならないものだと知りました。続いて慶應の先端生命科学研究所で、富田勝所長にこの20年間の数々の挑戦について伺い、最先端の設備を見学しました。その後注連寺で佐藤弘明住職のご案内で鐵門海

その死と共に失われる決定的な出来事ではないか。それらはひとたび失われたら最後、もはや二度とそのようなものとして姿を現わすことはない。死を以ってそれらは「無」に帰すのであり、そうであるが故にそれらは二度と回帰することのない唯一のものなのだ。こちらの死は「無」という顔をもち、先の自然の中の死がもつ「存在」とはおおよそ異なる相貌の下に佇んでいる。この「無」に直面した私は、ひとたび失われたら最後二度と回帰することのない唯一者だ。このような唯一者は自然の中には見当たらない。自然の中ではそれぞれが同じ生命（生そのもの）を分け与えられ・分けもつ存在者であり、それらの個性は何ら本質的な意味をもたない。生を担い・受け継いでゆく誰かがいればよいのであり、それが誰であるかは問われない。だとすると、私を唯一者へと指名する「無」という顔を、死は自然以外のいったいどこから受け取ったのか。「存在」という顔をもち死に向かい合う生と、「無」という顔のそれに直面する生とでは、その在り方に決定的な違いが生まれぬか。死の擬似体験を修行の中核に据えて千数百年の間受け継がれてきた羽黒の修験道は、これらの問いにどのように応ずるのか、応じて来たのか。

以上の問題提起の下、富田所長と私と学生諸君との間で、さらには他の引率教員をも巻き込んで活発な質疑応答と意見交換がなされました。それはセッションの枠を越えて翌日も翌々

上人の即身仏を拝観しました。夜には宿舎で生命科学者の富田勝先生を再びお迎えし、哲学者の斎藤慶典先生と共に、それぞれの立場から「現代の生命科学から見た生と死」について論じて頂きました。三日目は羽黒山でミニ山伏体験。白装束で滝行を行い、火を飛び越えて生まれ変わりました。夜には八朔祭に出かけ、修行をしていた本物の山伏を間近で見ました。最終日はTTCKで班ごとに「死から学ぶ生」について総括のプレゼンを行いました。懇親会では鶴岡の皆川治市長に対して代表学生が鶴岡に来て得られたことを述べ、市長からは温かい感想を頂きました。セミナーを支えて下さった鶴岡市役所の皆様をはじめ関わって下さった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

(鈴木亮子)

日も、学生たちによるグループ発表の直前まで、多彩なプログラムの合間を縫ってその時々集まったメンバーの間で継続され、自分たちの発表内容に満足できない或るグループなどは発表前日の深夜3時まで議論を重ねたそうです。そうした仲間への敬意の念も生まれる中、考えることの苦しさや深さを皆が共有した今年のセミナーも幕を閉じました。

(斎藤慶典)



松ヶ岡本陣にて



羽黒山踏破



修験体験 火渡り

庄内セミナーを終えて

私は普段経験することは出来ない山伏修行体験に興味を抱いたことがきっかけでこの庄内セミナーへの参加を決意しました。今回のテーマは「死から学ぶ生」でしたが、「死」や「生」とか漠然とした概念をこれまで真剣に考えた経験は自分にありませんでした。

セミナーを通して、庄内の歴史や伝統、食文化、慶應義塾が誇る先端生命科学研究所、修行体験…など幅広い観点からアプローチを試みました。そこで感じたのは、一見するとテーマと関係がないように思えること、つまり、ありふれたものが実は私たちの「死」や「生」を形作っているということです。そして見えない場面で人と人とはつながり、支え合い、命を育てているということです。

座学として頭で考えるだけではなく、庄内の地で己の目で見て、耳で聞いて、体で触れて実践的に学んだからこそ、気づくことができたと思います。何より皆で話し合い、お互いに考えを深め合った時間が非常に刺激的でした。私はこれまで一つの物事をじっくり考えたためしがあまり無く、疑問に感じたことをインターネット上で調べれば、すぐに欲しい答えが得られることに満足していました。ですが、現在は時間をかけて主体的に考え、自身の納得がいく答えを導き出すこともまた大切なことだと思っています。決して簡単に答えが浮かぶものではないですが、その考えた経験が身体に染み込んで、糧となると思います。だからこそ、これを機に日々の生活の中で“考える時間”を大切に生きていきます。

(文学部2年 星野 琉)

第10回庄内セミナー「庄内に学ぶ<生命>—死から学ぶ生—」

実施期間：8月29日（木）～9月1日（日）[3泊4日]  
 場 所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）他  
 参加人数：学部学生12名、院生1名、スタッフ8名 合計21名  
 講 師：酒井忠久（致道博物館 館長）、東山昭子（鶴岡総合研究所顧問）  
 大和匡輔（鶴岡シルク株式会社代表取締役）、富田勝（先端生命科学研究所所長）  
 参加費：8,000円 ※現地までの往復交通費は自己負担（現地集合・現地解散）  
 宿泊場所：休暇村庄内羽黒（鶴岡市）

【関連企画】  
 ・日吉メディアセンターの協力で庄内関連図書を展示（6/7～7/11）

スケジュール

8月29日	・現地集合（鶴岡駅） ・松ヶ岡本陣にて「過去を学べば未来が見える（世界に向けたサムライシルクの挑戦）」講師：大和匡輔（鶴岡シルク株式会社代表取締役） ・松ヶ岡開墾記念館見学 ・「庄内にまなぶ生と死」講師：東山昭子（鶴岡総合研究所顧問）
8月30日	・庄内藩校致道館で庄内論語の素読 ・鶴岡市文化会館見学 ・先端生命科学研究所にて「脱優等生が創るニッポンの未来」講師：富田勝（先端生命科学研究所所長）、バイオラボ棟見学 ・即身仏拝観（注連寺） ・対話と議論「現代の生命科学から見た生と死」斎藤慶典（文学部教授）、富田勝（先端生命科学研究所所長）
8月31日	・ミニ修験体験（羽黒山踏破、南蛮いぶしなど） ・八朔祭見学
9月1日	・グループ発表 ・懇親会 終了後現地解散

## 日吉キャンパス公開講座

2019年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え46回目の開催となり、9月28日から11月30日までの日程で行いました。毎年1～2回の開催で、テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての義塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことを目標にしています。定員350名のところ、最終的に402名の申し込みをいただき、大盛況となりました。

今回は「出口戦略とその先の未来」とし、10講師（オール慶應：現役の慶應大学の教員5名と大学・大学院の卒業生5名）による各90分の講演が行われ、分野はスポーツ（ラグビー・オリンピック）・金融・経済・天皇制・歴史・憲法・世界情勢（中国）・哲学・宇宙・ビジネス・ロボット・植物・細菌等の多岐に渡りました。

中でも目玉となったのは、日経CNBCのコメンテーターとしてもお馴染みの岡崎良介先生の「日本人の出口戦略」で、令和に入り話題となり続けている2000万円問題にまつわる話題と共に、個々の日本人についてはしっかり出口を描けるとのご見解等、現状の把握と今後どのように対応すべきかについて深い考察がなされました。各回の講演者やタイトルは右表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただけますと、過去の実施分についても記載がございます。（寺沢和洋）

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/exchange/open/>

講義日	講師	テーマ
9/28 (土)	3時限目 和田 康二	大学スポーツは可能性の宝庫！ —日本ラグビーの始祖・慶應大学ラグビー部が「法人化」した理由とその先の未来—
	4時限目 稲見 崇孝	“現代実学”獲得への道 —2020英国チーム受入れを通じて—
11/2 (土)	3時限目 岡崎 良介	日本人の出口戦略
	4時限目 都倉 武之	天皇制の「出口戦略」 —福澤諭吉・小泉信三が描いた「立憲君主」の未来—
11/9 (土)	3時限目 駒村 圭吾	家族と憲法 —同性婚訴訟の「出口戦略」—
	4時限目 呉 茂松	現代中国政治の新たな正統性源泉は？
11/16 (土)	3時限目 安西祐一郎	人は何のために生きているのか —「何のために」の心理学と哲学—
	4時限目 新谷美保子	イノベーションが生み出す未知の世界 —宇宙ビジネス法務の視点から—
11/30 (土)	3時限目 太田 智美	人間中心社会の終焉 —ヒトとロボット が暮らす未来社会—
	4時限目 糟谷 大河	きのこやカビの生き方から探る出口戦略



岡崎良介氏

## 学習相談 春学期 活動報告

日吉図書館内でレポートの書き方などの相談に応じる学習相談は、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」を過去に履修した学生がピア・メンターとして活動しています。今学期は93件（うち3分以上の相談は65件）のレポートやプレゼンに関する相談があり、昨年よりも増加しました。はじめてのレポート課題にとまどっている1年生からの質問が多く、取り組むべきポイントが見えて安心している相談者の様子も見られました。

（日吉メディアセンター 今井星香）

今学期も、相談者と同じ視線の高さを活かし、論題が定まらない、何をすればいいかわからない、など幅広い質問に対応しました。その中で、相談員の学び直しに繋がる質問が寄せられることや、「これから何をするか見通しが立った」と感謝してもらえることがあり、やりがいを感じています。さて、学習相談では、相談者の半分弱が、先生の紹介で来ています。レポート課題を出す際には、是非、学習相談を勧めていただけましたら幸いです。

（商学部4年 沙 云帆）



### ＜秋学期学習相談＞

9月30日（月）～1月17日（金）平日13～18時  
日吉図書館1階スタディサポート（学習相談）

利用方法：窓口へお越しください。Webからの予約も可能です。

<http://www.hc.lib.keio.ac.jp/studyskills/consultation.html>

共催：教養研究センター・日吉メディアセンター  
日吉学生部

## 「研究の現場から」

### ＜第25回＞研究の研究：自然科学と社会科学の協働を目指して

トマス・クーンが『科学革命の構造』を発表したことを一つの契機として、科学や技術を人の営みとして捉え、人文・社会科学のアプローチからそのあり方を理解することを目指した学術分野が形成されてきました。現代社会では科学や技術が私たちの生活に大きな影響を与えていますが、それらが人の営みによって生み出されているということは、その過程に携わる限られた人たちの価値観がそこに反映されていることを意味しています。だからこそ、研究を通じてそのような価値観を明らかにし、より多様な価値観が包含できるよう科学や技術を生み出す過程に関与することが求められているのです。20世紀後半に生命科学が急速な発展を遂げたことで「自然」や「生命」についての考え方が大きく揺らぎ、自然科学と人文・社会科学との協働の必要性は広く認知されるようになりましたが、その実現にはまだ多くの課題が残されています。今回はゲノム合成という新しい研究領域を例に挙げ、そのような協働の展望について議論をさせていただきました。貴重な機会をいただきましたことに御礼申し上げます。 [2019年6月19日（水）開催]（見上公一）

### ＜第26回＞バタイユ思想の「倫理」的射程——戦争をめぐる思索から

20世紀フランスの作家ジョルジュ・バタイユ（1897–1962年）の思想が「倫理」との関係で考察されることは、必ずしも多くありません。過激なエロティシズムに耽溺し、没理性を擁護した思想家として受け取られがちなバタイユが、第二次世界大戦の衝撃を経て、いかにして合理性から切り離された倫理を希求するに至ったのかを、被爆地広島を扱ったテキスト「広島の住民たちの物語について」（1947年）を主要な題材として検討しました。国家の次元での持続への配慮が、かえって、個人の次元での持続を軽んじる、戦争という決断をまるで厭わない事実をバタイユは憂慮します。国家理性が押しつけてくる破滅的な正しさに異を唱え、あくまで個人の生の瞬間的な（持続を顧慮しない）充実に拘ること。バタイユが「瞬間の倫理」と呼ぶこのあり方の歴史性とアクチュアリティとをめぐり、様々なご専門の先生方の知見を賜り、議論をさせていただけたことは、本当に貴重でした。素敵な機会を与えていただき、深く感謝申し上げます。

[2019年10月23日（水）開催]（石川 学）

### ■予告 第27回「研究の現場から」

「研究の現場から」は、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話していただき、思うままに意見を交わして参加者と語り合う催しです。軽食も出るざっくばらんな雰囲気のできるので、どうぞお気軽にお集まりください。（高橋宣也）

2019年12月11日（水）18：15～ 来往舎101にて  
ジョナサン・ディル（理工学部）  
村上春樹の『騎士団長殺し』を読む

## 読書会「晴読雨読」

### 丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む

教養研究センターで毎夏催している庄内セミナーのプログラムには、庄内藩の旧藩校、致道館での『論語』の素読が組み込まれています。庄内藩の儒学は、荻生徂徠を祖とする徂徠学の系統に属し、『論語』の読み下し方も独特です。庄内に行くなら、徂徠を分かっていた方が面白いのです。その徂徠を、江戸時代の思想には日本の近現代を「文明開化」以前にきちんと準備していた部分があったという文脈から、高く評価した書物と言え、丸山眞男の『日本政治思想史研究』に尽きます。教養研究センターに関わる方には、やはり読んでもらいたい。そういう趣旨で、読書会「晴読雨読」の一環として、この本を読む会を2018年度のうちに3回催し、2019年度も4月23日、5月28日、7月30日、9月25日と開いて、次回は12月4日の予定です。（片山杜秀）

### ハンナ・アレント『人間の条件』を読む

昨年に引き続きアレントの著書を読んでいきます。年が変わってからは1月11日、4月19日、5月17日、6月28日、8月2日、10月4日、11月8日と、昨年から数えて通算13回開催してきました。議論もいよいよ大詰め、最終第6章に突入しています。一般的には、政治哲学の文脈において「公共性」の復権を試みた書物、というイメージが強い『人間の条件』ですが、じつはここでの裏テーマのひとつは現代の科学技術をめぐる問題です。政治や哲学、さらには「公共性」という視点に立ったとき、科学技術のどのような側面が明らかになるのか——少しでも気になる方は、ぜひ読書会にお越しください。これまでの議論もふりかえりつつ、全体の総まとめとして現代社会に対するアレントの展望を読み解いていきますので、はじめての方もどうぞご心配なく。来たる12月20日にはついに感動の(?)フィナーレを迎える予定です。（西尾宇広）

- 【日吉キャンパス公開講座】 出口戦略とその先の未来**  
 9月28日(土)～11月30日(土) 全5日  
 3限(13:00～14:30) 4限(14:45～16:15)  
 第4校舎J29番教室
- 【基盤研究】 文理接続プロジェクト「医学史と生命科学論」**  
**第4回：後藤 勲 医療費の増加と医療の経済評価**  
 10月8日(火) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】**  
**日本・フィンランド外交100周年記念映画**  
**「東方の記憶」レクチャー付上映会**  
 10月24日(木) 17:30～20:30、来往舎 シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】 第5回：坂井豊貴**  
**ビットコインの設計と通貨の新時代**  
 10月30日(水) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【基盤研究】 文理接続プロジェクト「医学史と生命科学論」**  
**第5回：小川公代『フランケンシュタイン』とシェリーの天才論**  
 11月5日(火) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【コレgium・ムジウム・オペラプロジェクト2019】**  
**フィガロの結婚**  
 12月1日(日)、8日(日)、14日(土) 15:00～  
 協生館 藤原洋記念ホール
- 【研究の現場から】 第27回：ジョナサン・ディル**  
**村上春樹の『騎士団長殺し』を読む**  
 12月11日(水) 18:15～、来往舎 101
- 【学会・ワークショップ等開催支援】 シンポジウム**  
**交通と文学：鉄道の時代としての19世紀**  
 1月12日(日) 13:00～18:00、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】**  
**内観とシアターワークを取り入れた身体知教育**  
 1月26日(日) 10:00～17:30、来往舎 シンポジウムスペース
- 【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】**  
**プレゼンテーション・コンペティション**  
 2月6日(木) 14:00～18:00、来往舎 シンポジウムスペース

10月  
11月  
12月  
1月  
2月  
3月

- 【HAPP】 日吉音楽祭2019**  
 10月5日(土) 14:00～18:00、協生館 藤原洋記念ホール
- 【HAPP】 慶應義塾南三陸プロジェクト活動報告(2011～現在)**  
 10月11日(金)～12月11日(水)、来往舎 イベントテラス
- 【研究の現場から】 第26回：石川学**  
**バタイユ思想の「倫理」的射程——戦争をめぐる思索から**  
 10月23日(水) 18:15～、来往舎 101
- 【HAPP】 出雲大社の建築に見る古代観**  
**——近世人の夢見た古代出雲——**  
 10月26日(土) 15:00～16:30、来往舎 シンポジウムスペース
- 【HAPP】 Keio Refugee Week 2019展示**  
 10月28日(月)～11月15日(金) 映画上映・講演会  
 来往舎 イベントテラス、シンポジウムスペース
- 【情報の教養学】 第6回：角田直行**  
**インターネット企業におけるデータとAIの作り方、使い方**  
 11月6日(水) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【基盤研究】 文理接続プロジェクト「医学史と生命科学論」**  
**第6回：片山杜秀**  
**「日本イデオロギー」としての科学と技術—日本ファシズムにおける「文系」と「理系」の混淆の仕方についてのイントロダクション**  
 12月17日(火) 18:15～19:45、来往舎 大会議室
- 【学会・ワークショップ等開催支援】**  
**第4回意匠学会デザイン史分科会／ウィリアム・モリス研究会**  
 12月21日(土)、来往舎 中会議室
- 【基盤研究】 講演会no.5南條史生**  
**アート：見えないものを見る**  
 1月15日(水) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース
- 【学会・ワークショップ等開催支援】**  
**AIと共に読む古典籍(仮)**  
 2月8日(土)、来往舎 シンポジウムスペース
- 【教養研究センター選書出版】**  
 3月予定

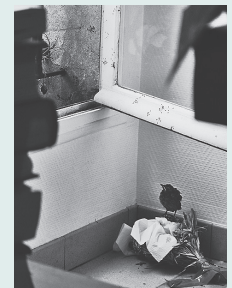
私の(ク)ロウ(タ)ドリ自慢

ヨーロッパの街でよく遭遇するクロウタドリは、日本の山地や森林で見られる黒鶇に一见似ていますが、都市で暮らすことを厭わない点が対照的です。ミラン・クンデラは『笑いと忘却の書』で、「クロウタドリによる人間の街の侵略」に注目していますが、臆病なのに人懐こい様子をした不思議な鳥です。その名の通り歌声が美しいだけでなく、地面を歩き回る姿が親しみやすく、さまざまな芸術作品の着想源になってきました(ミュージルの「黒つぐみ」やイオセリアーニの「歌うつぐみがおりました」などもクロウタドリのことです)。

なわばり意識が強く、集合住宅の中庭にもよく陣取っています。留学先のパリで、庭に住んでいたクロウタドリに干しぶドウを与えてみると、毎朝窓辺で囀って起こしてくれるようになりました。壁を覆う蔦のかげに同じ個体が巣を作り、巣立ちに失敗した雛が猫に襲われていたので、しばらく部屋で保護しました。野鳥との共同生活は驚きの連続でしたが、なかでも雛が口にしていた半ば寝言のような歌の衝撃は忘れられません。それはさえずりの習得過程での不完全な鳴き声で「口舌り」と言うのだと、鳥類学者の樋口広芳先生に教えて頂いたのですが、天国に来てしまったのかと錯覚してしまうほどのやさしく美しい声でした。(経済学部 福田桃子)



窓辺で待っているクロウタドリの雄



まだ飛べないが、ずっと外を見ている雛

